

[講演会抄録]

## 2012年度連続研究講座： グローバル化下の若者 第2回「若者と権利」

2012年5月17日

川上 園子（公益社団法人 アムネスティ・インターナ  
ショナル日本 活動マネージャー）

川上 皆さん、こんにちは。アムネスティ・インターナショナル日本の川上と申します。現在、アムネスティ日本の活動マネージャーをしています。アムネスティは、国際事務局がロンドンにあり、世界では最大規模の国際人権NGOです。

私はアムネスティ日本で10年ほど働いていますが、これまで、人権、あるいは環境問題の分野で20年ほど活動が続けています。「どうして？」と聞かれると、「たまたま」というふうにしかならぬのですが、いろいろな人との出会いや経験の中で、自分の中で何がやりたいのだろうと見つめ直していく中で、結局、NGO職員という形で仕事をしています。

自分自身について、少し話したいと思います。そもそもなぜ社会問題に興味を持ったかということですが、父の影響があったのかな、と思っています。社会問題に非常に興味のある父だったので、夜によく海外ドキュメンタリー作品をいっしょにみていました。その中で、たしかラテンアメリカの国々が、どうして米国に対して抵抗運動を始めているのか、ということ掘り下げるシリーズだったと思います。当時ニカラグアと

いう国で、米国の傀儡政権と言われていたソモサ政権に対して、サンディニスタという反政府勢力の戦線が戦いを挑んでいた。彼らが勝って、米国のソモサ政権が打倒されたとき、米国から徹底的に嫌がらせを受けます。その過程の中で、国連の中で、当時のオルテガ大統領が演説し、「ニカラグアの国民はどんなにボロを着ても、絶対にアメリカの言うことだけは聞きたくないのだ」というようなことを言っていました。その前後のストーリーは全く覚えていないのですが、その言葉が非常に印象に残りました。

なぜそうまでして、アメリカから自由になりたいというふうに思ったのか。その疑問が多分、わたしが国際問題に関心を持った出発点だったと思います。

その後、大学に入りましたが、英語が好きで、国際問題にも興味があって、何かやりたい、とにかく日本の外に出たいと思いました。大学の3年になるときに、大学を1年休学して、イギリスに1年、語学留学という形で行きました。その中で、初めて、NGOという言葉を知りました。

イギリスにはオックスファム・ショップというのがあちこちにありました。オックスファムという開発支援系のNGOの運営する、セカンドハンドやフェアトレード商品をお店ですが、それが町の至る所にありました。それで、オックスファムって何だろう、と思ったのがきっかけでした。

また、イギリスの大学生や語学学校の先生が、グリーンピースやオックスファムなど、NGOについて日常的な会話の中で話しているということに気がつきました。そこでまた、それって何なのだろうと興味を持ち始めました。

それで帰国後に、何かそういう、NGOでやることがないのかなと思って、いろいろ探したりしたのです。たまたま雑誌で、日本国際ボランティア

アセンターの代表の話が出ていて、ボランティアというのは自分が責任を持って行動を取るることなのだというような言葉が書かれていました。それを読んだときに、すぐバツと電話してしまったのですね。

当時、大学は静岡の三島で、日本国際ボランティアセンターの事務所は東京です。当時よくやったなと思いましたが、静岡から東京に週に2回ぐらい通って、ボランティアを始めました。そのとき、日本国際ボランティアセンターの職員から、川上さん、あなた、NGOの職員をやってみない？ と言われました。実は就職は内定していて、どうしようかなと思ったのですが、3年ぐらいNGOで経験を積んで、その後また転職すればいいや、という気持ちでNGO職員になりました。そういう意味ではたまたまだったと思います。

最初は小さな環境NGOからでした。熱帯林行動ネットワーク(JATAN)という団体で、熱帯林破壊の問題を、特に木材や木材製品の貿易の現状を分析し、日本政府やほかの国に改善を求める提言をしていました。非常に小さな団体だったのですが、中身的には非常に濃くて、そういう分析をやっているNGOがほとんどなかったために、海外の環境団体と協力しながら活動していました。

木材貿易について調べると同時に、熱帯林とともに暮らしている人たちがどういう状況に置かれているのか情報を集めたり、そういう人たちを日本に招いて、日本社会の中で熱帯林の問題を伝えていました。

その中で、先住民族と言われる人たちと会うことになりました。いろいろな国の人たちと出会ったと思います。赤道直下にあるボルネオ、インドネシアではカリマンタンと言われていますが、そこから当時日本は、マレーシア側からもインドネシア側からも木材の輸入をかなりしていたので、そのボルネオ／カリマンタンの先住民族と交流することができました。

先住民族と一口に言っても、言語だとか文化習慣で、いろいろな民族

に分かれている。その中でプナン族は、すべてではないと思うのですが、それでも、まだ森の中を移動しながら狩猟採取をしている人たちがいました。彼らは生活のほぼすべてが森の産物に依存しているので、森が破壊されると生活基盤が全部崩壊するわけです。熱帯林は一回伐採してしまうと再生はなかなか難しいと言われていました。そこがものすごい勢いで伐られていく。その中で、プナンは完全に森の生活から切り離されてしまい、生きていく手段を奪われていきました。

先住民族の人たちは、その地域によってももちろん違いますけれども、慣習的に土地を管理しています。しかし、開発によって国家の中にどんどん組み込まれていくということで、その中で土地の使い方を国が決めていく。自分たちで自己決定する権利が奪われていきました。

どんな訴えても、慣習的な土地の権利は、州政府や国に後回しにされてしまう。自分たちの権利を訴える術がない。そういう中で、彼らが住む場所、生きていく場所がどんどん小さくなっていきました。

伐採して、ではどういうふうに使っているかということ、木材を日本に持ってくる。丸太や製材にして海外に輸出し、その後、伐採した土地には、アブラヤシというプランテーション、これは例えばマーガリンや洗剤をつくる時に洗剤の原材料としても使われますけれども、アブラヤシのプランテーションをつくっていきます。

土地を奪われたり、生きる術を奪われていった人たちは、伐採した木材を運ぶ伐採道路に立って、トラックを通させないようにしました。槍を持って、お父さんと子供、家族で、あるときは3人ぐらい、時にはコミュニティの人たちが集まり、毎日、伐採道路、要するにトラックが往復する道路を、自分たちの体で止めようとしてきました。

わたしはこういった彼らの行動に衝撃を受けて、だんだん自分の関心が人権問題に向いていきました。ここまでの彼らの状況をどうして変えられないのか、彼らにだって権利は当然あるのに、なぜそれが守られ

ないのか、いろいろなことを考え始めました。

先ほど言ったように、先住民族は、もちろん場所や地域によって違うのですけれども、いろいろな開発の中で、自らの存在、生存、それから権利というものがどんどん脅かされています。不幸なことに、先住民族が住む地域というのは、天然ガスや鉱物、木材であるとか、天然資源が非常に豊富な場合が多いのですよね。それがゆえに開発がいったん入ってくると、とめどもなく流れ込んでくる。例えば国家であったり多国籍企業であったりという形で、開発が非常に巨大な力で、圧倒的な力で入ってくる。それに対して本当に「持たない人たち」というのが、本当に存在する。権利を持たされない状況に置かれているというか、権利を主張することができない状況に置かれている。そういう人たちの抵抗運動というものを、このNGOの仕事の中で見てきました。それはボルネオ／カリマンタンの先住民族だけではなく、世界の各地でそういったことが起きているということを、この中で学んでいきました。

人権にもっと関心が出てきたのですが、ちょっと疲れて休みたいなという時期がありました。というのも、職員が少ないので、もうフル稼働なのです。また、普通の会社に就職したほうがいいかな、といろいろ考えていました。そのとき、これもたまたまだったのですが、別の団体の人に、人権問題に関心があるのだったら、うちの団体でやってみませんかと誘われました。それでさらに小さな団体で、休みたいのだったらバカなど、今だと思うのですけれども、もっと小さなNGOの職員になりました。

日本インドネシアNGOネットワーク（JANNI）という団体で、インドネシアの人権状況を監視し、人権状況の改善や民主化を支援するための提言を日本政府やインドネシア政府に行っていました。

この団体にいるときに、もう一つ、大きな出会いがありました。ずっと海外の問題に関心があって、海外のことをやってきたのですけれども、足元の国内の人権問題に出会うことができました。

1996年に、ある人から電話がかかってきて、それは日本人だったのですけれども、パスポートを取り上げられたインドネシア人の研修生がいますと訴えていました。パスポートを取り上げられて、それを取り返したいが、どうしたらいいだろうという相談でした。当時わたしは、研修生が何なのかよくわからなくて、パスポートを取り上げられるということはどういうことかもよくわかりませんでした。

実際に話を聞くと、研修生として日本に来ただけけれども、もう残業続きで毎日働かされて、パスポートをずっと取られていたと。ほとんどお給料もまともに払ってもらえない中で逃げ出したのだと言います。ところがパスポートは社長が持っているから、帰国するためにそれを取り返したい、なんとかしてくれないかと、そういう相談でした。

調べていくと、研修制度というのは日本政府がつくった制度だとわかって、なぜ日本の制度の中でこんなことが起きているのか、本格的に調査を試みることになりました。インドネシアつながり、ということで始めた調査でしたが、本格的に2年かけて調査しました。当時、インドネシア人研修生が上野公園に、土曜日などは200人ぐらい集まるという状況でした。調査のために、毎週土曜日に上野公園に通って、彼らから聞き取りを続けました。

研修制度の背景について、少しだけご説明します。80年代、当時の日本はバブル経済の最中でした。皆さんはたぶん、就職氷河期のいまいか知らないと思いますが、当時はバブル期と言われていて、企業は慢性的に人手が不足していました。特に中小企業などは本当に人がきません。そういう中で、外国人労働力を入れたいという声も、経済界から強くあったのです。ところが、日本はいわゆる外国人の単純労働者は認めてい

ません。外国人の労働力はほしい、しかし外国人には定住してほしくない。そういう議論がこの当時、経済界や政治家の中から出てきました。

そこで日本政府は苦肉の策として、外国人研修制度を作りました。これが1990年です。その後、93年に外国人技能実習制度を作りました。これらの制度は、主にアジアから若者を呼んで、日本で学んだ技術・技能・知識をその人に移転し、その本人が本国に帰ったら、その国の経済発展に貢献することを大きな目的として掲げていました。

技能実習生度では、研修期間が1年、技能実習期間が2年の合計です。この期間に、外国人に日本に来てもらって働いていただきましょと、そういう制度を日本政府は作ったわけです。

これは非常にうまくできた制度で、外国人を定住させないで、ローテーションというか、回転ドア式に入れては出し、ということができているシステムになっています。

国際貢献、途上国の人材育成という名の下で、アジアの若者、中国を筆頭にインドネシア、ベトナム、フィリピンの20代から30代の男性も女性も、労働力として「輸入」するわけです。そして、協同組合などを通じて、日本の中小企業や農家などに研修生を派遣していきます。リーマンショックや3.11の震災によってその数はやや落ち込んでいますが、ピーク時には研修生、技能実習生を含めて、年間で約20万人が日本で働いていました。20万人という数はすごい数です。非常にうまくシステムとしてでき上がってきて、右肩上がりでの数が増えていったわけです。

しかし、実際には研修ではなく単純労働です。その上で、長時間の残業で、休日なしに働かされることが多くあります。また、賃金が未払いだったり、1か月の給料が1万8,000円、2万円しか払われない、そういったことががざらにあります。

わたしがインタビューした研修生の中でも、特に中国人研修生の取り

扱いがひどいケースが多くありました。手取りの給料がほとんどない中で、食料品すらまともに買えないという人も、その当時いました。残業代は、1時間300円、350円という形で、ほとんど足しにならない。残業をとにかくやって、ほとんど寝ないで働いて、やっとなんとか数万円になる。

その上で、彼らは、私生活についても非常に厳しい管理を受けています。ちなみに、私はインドネシア人研修生から、「ボクたちはロームシャ(労務者)じゃない」と言われたことがあります。かつて、日本軍がインドネシアを占領したとき、地元のインドネシア人たちを強制労働力として使い、その人たちを労務者と呼んでいました。占領時代のことはインドネシアの教科書などで説明されていて、若いインドネシア人でも労務者という言葉は、みんな知っています。研修生は、自分たちはロームシャじゃない、奴隷じゃないと言っていたのですが、それだけ過酷な状況で働かされていました。

自由がないと言いましたが、例えば常套手段としてパスポートが取り上げられます。皆さん、あまり感覚はないかもしれませんが、自分が海外に行ったときに、パスポートだけが唯一、自分の身分を証明するものになります。非常に大切なものです。そういう大切なパスポートを、まず取り上げて、研修生たちを管理下に置くわけです。

また、貯金通帳や印鑑も取り上げられます。これも非常に多かったです。つまり、研修生・技能実習生が自ら自由にお金を引き出すことができない状況を作ってしまう。さらに、強制的に貯金をさせて手元に残る現金を少なくさせる、あるいは、研修生が賃金や残業のことで不満を企業や組合に言うと、研修生側に問題があったとして、保証金や違約金という形で多額のお金を要求することもあります。

また、外出することや電話をかけることが許されない場合もあります。外出できても、そのたびに必ず届け出を出す。家族に手紙を書くことも



制限されていた人もいました。

例えば、インターネットカフェに行くと罰金が2万円、というケースもありました。要するに、こういった自由の制約をたくさん作ることで、できるだけ研修生たちが外部とコミュニケーションを取らないような状況を作り出そうとしていました。

それはなぜかという、企業や組合も、不正なことをしているという自覚はあるわけです。その不正なやり方が外にはばれないように、できるだけ内側に隠しておこうとするわけです。こういう中で、研修生や技能実習生の権利はどんどん奪われていくという状況になります。

研修生・技能実習生は、企業や組合に対して不満を言うと、「強制的に帰国させるぞ」と脅されることがよくあります。帰国させられると、先ほど言った多額の違約金を支払わなくてはいけないので、研修生・技能実習生たちが一番恐れているのは、この「強制的な帰国」です。なぜなら借金が返せないからです。多くが、研修生として日本に来るための準備として、多額のお金を払わされます。あなたたちと変わらない年齢の女性や男性が、家を担保にして、お金を準備します。その10倍、20倍のお金が、日本で研修生として働けば返ってくるという甘い言葉をささやかれ、それを信じて来るわけです。やはり日本は先進国だから、しかも研修制度があって、日本に来たら、きっと勉強しながらお金がきちっと入って、家族を楽にしてあげられるのだと、そういうふうに来て来るわけです。ですから、借金を残したまま帰るということは、彼らにとっては全くありえないわけです。それはもう、絶対的に避けなければいけないことなのです。

これ、指を4本切断した女の子の写真ですね。ちょっとショッキングなのですけれども、20歳ちょっとぐらいの女の子の手です。研修の作業中に指を4本切断しました。普通、日本だったら、あるいは、たとえ超過滞在（オーバーステイ）の労働者であっても、労働者として扱われ

ていれば、法律上、労働災害補償を受ける権利があります。仕事で指を失ったことに対して、お金で補償がされるわけです。

ところが、研修生というのは労働者と見なされていません。研修生だから、勉強しに来ているから労働者じゃない、と言われるわけです。そうすると、彼女は4本の指を失ったにもかかわらず、補償がないのです。もちろん、研修生保険というのがありますが、それは治療費ぐらいしか出ません。この女性は20歳くらいでしたが、指を失って、これから生きていかなくはなりません。ところがそれ補償というのは、ここでは全然計算されないわけです。日本で働く労働者として認められれば労災が受けられるのですが、彼女は受けられなかったのです。

要するに、労働力として必要だけれども、日本で安定的に暮らしていってほしくないために最初から権利を持たせないようにする、それがこの研修制度の設計だというのが、調べるうちにわかってきました。あるいは、「権利を最初から持たせない」ということと併せて、「いつでも権利を奪える状況」を容易にする制度設計とも言えるでしょう。

つまり、非常に囲い込まれた状況にいるわけです。地方の小さな町工場に行って、その周辺にはあまり人も住んでいない。工場の敷地の中に建てられたプレハブの中で暮らして、朝の9時から夜の11時、12時まで働いて、外に出ることはほとんどない。3年間日本にいて、最寄り駅に行ったことがないという女性もいました。全く外部と接触を取らせない状況の中で、何が起ころうと彼らが訴えることを許さない、そういうことが可能になる制度設計になっていると思います。

そういった中で、実際には時給が350円しかない、と、失望や絶望が彼らの中から出てきます。

木更津事件というのがありました。これは、ある中国人男性の研修生が、共同組合の理事長をナイフで刺して死亡させたという事件でした。この事件では、殺人か傷害致死罪なのかが裁判で争われました。わたし

はその裁判を2度ほど傍聴しましたが、結局、殺人罪で懲役17年になりました。でも、彼がなぜその組合の理事長を刺したのかというと、やはり、非常に大きな額の借金をしてきたにもかかわらず、残業代がきちんともらえない。想像以上にお給料が少ない、これでは3年間で借金を返せないという絶望や焦りの中で、ちゃんとお給料をもらえる会社に移してくださいと、何度もお願いしていたのですね。

ある朝、では荷物をまとめろと言われて、彼は会社を替えてもらえるのだと思って、ものすごく希望を持って、荷物をまとめました。ところが車に乗る前に、初めて成田空港に連れていかれる、帰国させられるのだということがわかったのです。そこで彼はもうパニックになりました。先ほどもお話したように、強制帰国は彼らの中では一番避けたいことなので、彼はパニックになりもみ合いとなり、その中で理事長を刺してしまった、とわたしたちはそう思っていますが、裁判では認められず、殺意があったと結論付けられました。その中国人男性は、残念ながら精神的にもかなりまいってしまって、刑務所の中にいながら病院に入ったり出たりという状態が続いているそうです。

このように、権利を持たされない、あるいは奪われる中で絶望し、本当に悲劇が起きたというのを、この調査をやっている中で見るようになりました。

足元というか、国内の人権問題について、実はわたしはあまり見えていなかったと思います。それまで海外のほうばかりに目が行っていて、ふと、では日本の中でどうなっているのかと考えたときに、この外国人研修制度を通して、日本社会の中で「見えない存在」、「見えなくさせられている」と言ってもいいと思いますが、そういった存在が少しずつ見えてきました。

私は、外国人研修制度について10年ぐらい取り組んできましたが、グローバル化の中で日本の中に移住労働者と呼ばれる人たちがいて、実

は日本の産業を彼らが下支えしているのだと気がつきました。お弁当一つ、携帯電話一つ、実は移住労働者がいないと作れないと言われてます。ところが、彼らの存在というのは、皆さんが日常生活を送っている中で、全然見えてこないですよ。でも、そういう人たちが、実は経済格差と日本の労働力確保の要求の中で確実に存在しているということが、この10年くらいの中で初めて見えてきました。

例えば、研修生や技能実習生以外でどういう人たちなのかというと、超過滞在者（オーバーステイ）、政府は不法滞在者という言葉を使っていますが、そういう人たちがあげられると思います。また、日系ブラジル人もいます。彼らは働くことは認められていますが、自動車など製造業の下請け工場の派遣として働いている場合が圧倒的です。このあいだのリーマンショックで真っ先に切られたのが日系ブラジル人労働者だったと言われてます。

こういう人たちが、確実にわたしたちの社会にいるけれども、あまり見えてこない。では、どうして見えないのでしょうか？それは、彼らの権利は常に脅かされている、あるいは最初から、研修生の場合のように、制度的に権利が与えられないことが、一つにはあると思うのです。あるいは、最初から「見えない存在」である中で、さらに権利が脅かされ、もっと「見えない存在」にさせられていく、とも言えるかもしれません。

今、さらに日本の社会の中から排除されようとしている人びとがいます。今年（2012年）の7月に、外国人を管理するための「在留カード」というのが新しく導入されます。これは、例えばオーバーステイの人たちは、在留カードを受け取るということのはできません。今まではオーバーステイであっても、自治体へ行けば自治体が外国人登録証というのを出してくれました。外国人登録証があると、自治体は住民としてカウントします。住民としてカウントされれば、自治体が提供する公共サー

ビスを受けられることになるわけです。ところが今回、オーバーステイの人たちが完全に在留カードから排除されてしまいます。そうすると、彼らは住民としてそこには存在しない、という状況に置かれてしまいます。この社会の中で確実に生活を営んでいるのに、住民として認められない存在になるわけです。

日系ブラジル人についても似たようなことが言えると思います。先日、日系ブラジル人労働者の子供たちを描いたドキュメンタリーで「孤独なツバメたち」という映画をみました。先ほど言ったように、日系ブラジル人労働者の多くは派遣労働者です。日系ブラジル人労働者の子供たちは、日本で生まれ育った子もいれば、幼くして日本に親と一緒に、日本に来たというケースもあります。

当然、子供たちというのは、日本の中で育っていくわけですね。日系ブラジル人が日本に来るようになったのは研修制度が始まった時期と同じです。先ほども言ったように、労働力が必要になったときに、日本政府は、研修制度を作ることと併せて、日本との血のつながりのある日系人なら働いていいですよ、という枠組みを作りました。それでブラジルやペルーから日系人が働きにきたわけです。それは日本の政府が扉を開けたわけです。それからもうもう20年以上たつ中で、当然、子供たちは大きくなっていくわけです。

ところが、彼らはブラジル国籍という外国籍の子供たちなので、義務教育の対象にはなりません。ブラジル人学校とかペルー人学校とか、外国人学校というのはあるのですけれども、そこは私塾扱いで、公的な支援がない。そのため、学校の維持費は生徒の両親が相当負担することになります。皆さん、例えば学割がありますよね、通学のとき。学割がないので、彼らは通学するための交通費を全額出さなければいけない。それは派遣で働いている親にとってはものすごく負担になってくる中で、

外国人学校にすら行くことができない子供たちも出てきます。

日本の公立学校では基本的に外国人を受け入れる体制が不十分なので、その中で言葉がわからない、あるいは外国人であることで差別を受けたりしてドロップアウトしていった子供たちが多くいます。その子供たちを受け止めるはずだった外国人学校も、公的な支援を受けられない中で、そこからドロップアウトしていく、という状況があります。ですから、日系ブラジル人労働者の子供たちは、中卒が非常に多いという報告があります。中卒で働いているけど、結局、この映画のチラシに書いてあるように、日本の社会では「デカセギの子どもは会社で課長や部長にはなれない」と。一方で、ブラジルに帰っても、日本で生まれ育った自分は外国人扱いされることもある。このドキュメンタリーは近々公開になるので、ぜひ見てほしいと思います。

外国籍の住民は、確実に日本社会の中で増えてきています。彼らの権利が保障されるために制度をきちんと整えていかなければいけないと思います。しかし、そういった制度が日本では遅々として進まないというか、全然進んでいかないのが現状です。労働者がほしいから増やしていくけれども、ちゃんとした形、つまり権利を保障する形では受け入れたくない、というのが現状です。こういうひずみが、いま、若い世代の子供たちに来ているということが言えると思うのです。

これまで、先住民族について、それからがらっと変わって外国人、日本の中の外国人について話してきましたが、キーワードとしては「権利」「人権」があったと思います。

わたしも20年以上NGOでスタッフとして働いていますが、この言葉をちゃんと分かりやすいように伝えられるかということ、自信がありません。先日、人権を社会学の視点から研究されている方に来ていただき、

アムネスティ日本の関係者を対象に勉強会を行いました。そのときに私自身が学んだことを、今日最後に少し話したいなと思います。

「権利」と言ったときに、何がモラルや道徳とかと何が違うのでしょうか。少なくとも、今日お話しした中で出てきている「権利」というのは、社会の中で要求することが認められている。「権利」は、それが奪われたり、あるいは侵害されたときに、それを救済する措置というのが本来はあるべきものです。

「権利」とすることで、弱い立場に立つ人が権力に抵抗できるようにする。例えば、社会的な支援体制や法律をつくるなど、いろいろな形で制度を整えていくことで、弱い人たち、権利を奪われやすい人たちが、その権利を奪われたときに対抗したり、保護されたりできるような枠組みを作っていく。それがとても重要なのですよ、ということ、その勉強会で教えていただきました。

「人権」とは、そうした「権利」の中でも特別なものとして定められています。例えば、では人権とは一言で言い表すと何なの？ と聞かれたときに、先ほどのボルネオや外国人の話のときに、「人間らしく扱ってほしい」という思いが共通にあると思うのです。自分だって1人の人間として、尊厳を持っているのだと。人間らしく生きることをあなたも認めてください、と。先住民族の人も、先ほどの中国人の研修生も同じことを言っていました。

世界中で苦しんでいる人が人間らしく生きていくために必要なことを要求して、社会の中でそれが共通の苦しみ、要求であるという合意が形成されていく。例えばアムネスティの運動は何なのだろうと思うと、社会の中で、そういった合意形成を作り、新たな権利として確立していくための運動なのだろうなと思います。また、確立された、もう共通の価値としてある権利が保障される社会を作っていかなければいけない。それが私たちの役割だろうと思います。

すみません、最後がとても駆け足になり、しかも抽象的でわかりにくいのですが、今日、一つだけ覚えておいてほしいのは、日本の社会であれ、他の国であれ、「見えない存在」というのはいろいろなところにある、ということです。権利を奪われた「見えない人たち」というのは必ずつくり出されていて、それは、わたしたちが見ようとする努力をしない限り、なかなか見えてこない、ということです。

今日は二つの事例を言いましたけれども、皆さん、これから生きていく中で、いろいろなことを見る機会があると思います。その中で、そこに尊厳というものがあるのかな、とか、人間らしく生きる権利が、そこにちゃんとあるのかな、ということ、いろいろ考える視点を持つことができればいいのかと思います。